

九州地区研究会報告

熊本大学 古賀倫嗣

〔日 時〕 4月4日(木)

〔場 所〕 九州大学文学部社会学研究室

〔出席者〕 木下謙治 古賀倫嗣 坂本喜久雄 徳野貞雄 内藤莞爾 野崎敏郎
原 宏

1. 研究報告

木下謙治 「村落研究をめぐる若干の問題」

2. 報告要旨

福岡県糸島地域（地方中枢都市近郊農村）、新潟県大和町（中山間地農山村）、山形県天童市（平地農村）を対象に、平成6年、農政調査委員会によって実施された集落調査の結果に基づき、「変動期」にある農村・農家生活、農業生産の内実の検討が行われた。

報告では、①中間的単位の大字の視点、②土地管理、③小農社会から混住社会へ、④家業經營小団体としての家、⑤自治組織、⑥氏神祭祀、⑦近隣組織という、7つの観点からのインテンシブな集落の分析が行われ、生産と生活の不斷の分離のなかにある実態が解明された。

とくに、農村集落の変動過程については、4つのフェーズが区分され、それぞれの段階での課題が捉えられた。まず、「フェーズ1」は、生産と生活が未分化のまま相互依存的な組織が形成されている伝統的な農村集落社会（ムラ）である。これが、兼業の深化、混住化などのために生産機能とそれ以外の生活機能とが分化し、「フェーズ2」に変わり始める。農家の組織と集落の自治組織が分離し、相互に独立的なものとなってくる段階である。次の「フェーズ3」を特徴づけるのは、集落の合併統合、分離など集落再編成の課題がクローズアップされてくるところである。それは、生産機能が集落を越えて展開されるということに裏付けられるが、この段階では、行政の果たす役割が大きい。

最終段階（もしくは望ましい段階）に対応する「フェーズ4」は、拡散する生活関心及び生活行動と、広域化する生産機能とを連関的に結びつけながら新しい農村社会の地域的枠組みを形成していく局面である。このような方向は、生活拡充的なニーズの高まりと、土地管理、福祉など生活課題解決の取り組みの高まりなどを通して形成されつつある。こうした「社会生活組織（森川）」は、今後、農村コミュニティ形成の鍵になると考えられると問題提起が行われた。

3. 討論要旨

報告を受けて行われた討論では、①調査対象地の類型化の問題、②「大字＝複数集落」

説、氏神の理解に関わる問題、③農地管理・利用形態の地域差の視点、④生産組織から切斷された自治組織の展開過程、⑤地域組織の担い手、コミュニティ形成能力に関する問題など、活発な質疑応答とさまざまな意見の開陳が行われた。

なお、次回の地区研究会は、7月中旬の予定である。